

奥野昌綱が『馬太傳福音書』に書き入れた口語化改訂案の語彙 —ヘボンとブラウンによる文語訳との語種的な異同—

松 本 隆

【要旨】

ヘボンとブラウンが文語で共訳した 1873 年刊『馬太傳福音書』に、奥野昌綱が口語化を意図して書き入れた草稿のうち、語彙に関する記述を抜き出して整理し、もとの文語文との語種的な異同を数量的に比較した。その概要は次の通りである。ア) 語彙的な言い換えの大半は、和語を別の和語で代替する案が大半を占める。イ) 漢語を別の漢語で代替する案は少数である。ウ) 漢語から和語へ、またその逆に和語から漢語へ言い換える、異なる語種間の代替案も少数である。エ) 異語種間の言い換えは少数のうえ、漢語と和語の増減は互いに相殺しあう程度の僅差である。オ) そのため、奥野の書き入れ草稿をもとに文語から口語に改訳した場合、本書全体の語種構成比率はほぼ維持される。以上の5点から、本書の口語化が語彙にもたらす影響は、語種の量的な変化でなく、質的な変容であることが示唆された。

【キーワード】

聖書和訳、漢語、和語、J.C.ヘボン (James Curtis Hepburn)、S.R.ブラウン (Samuel Robbins Brown)

◎口語化改定案入り『馬太傳福音書』電子版ダウンロード：[pdf版](#)、[テキストファイル版](#)

1 ヘボンとブラウンによる邦訳文と奥野による改訂案

本稿は、中村 (2000: 縦組 142-146, 横組 76-115) が「乙本」として紹介する、奥野昌綱手沢本『新約聖書 卷之一 馬太傳福音書』 (以下『馬太傳』と略す) 内の書き入れ草稿のうち、語彙的な記述を抜き出し語種別 (和語か漢語か) に分類して、もとの邦訳語と改訂案を対照しやすいよう資料として整理したものである。あわせて『馬太傳』とその改訂案の語彙的な特徴についても素描する。また基礎資料として作成した、口語化改定案入り『馬太傳』電子版を付録とした (上記電子版テキスト ([pdf版](#)、[テキストファイル版](#)) と本稿第7節を参照)。

J.C.ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815-1911) が開港まもない横浜で S.R.ブラウン (Samuel Robbins Brown, 1810-1880) らとともに聖書の邦訳を先導し、奥野昌綱 (1823-1910) がその補佐ならびに日本語教師として重要な役割を果たしたことは、今日まで色々な形で伝え

られている(黒田 1936、秋山 1982、望月 1987、佐々木 1991)。ここに取り上げるヘボンとブラウンの共訳による 1873 年の『馬太傳』は、のちに彼らを中核とする聖書翻訳委員会が 1877 年に出版する分冊版マタイ伝をへて、同委員会 1880 年『新約全書』へと結実していく初期の邦訳である。1873 年版と 1880 年版の文面を比較すると、前者は漢字の使用を控え平仮名表記を中心とした木版の和装本であるのに対し、後者は中国の漢訳聖書と同じ漢字列を多く引用した活字印刷の洋装本であるため、見た目の印象が大きく異なる。しかし訳文は一貫して和文を基調としている。1880 年版でも、漢字のほぼ全てに施されている振り仮名は、訓読みの和語が中心で、音読みの漢語は少ないことが指摘されている(御法川^{みのりがわ} 1965、森岡 1966、鈴木・福島 2000)。

ヘボンやブラウンら来日宣教師が目指したのは、この国の人々にあまねく福音を伝えることであった。そのため、限られた少数の高識字層だけが読める漢文調でなく、一般庶民も無理なく理解できる和文調で、しかも内容にふさわしい格調の漂う書き言葉を求め、平易な文語文を採用した。

中村(2000: 143-145)は、1873 年版『馬太傳』の邦訳と、そこに書き込まれた奥野の記述を比較して「できる限り分かり易い通俗語や口語的文体に改めようとする明瞭な意図がよみとれる」と概括する。さらに中村は奥野の書き入れを分類して、①文体の変更、②語彙・表現の言い換え、③聖書独特の漢語のやわらげ、④尊敬表現の付加、⑤説明的な語句の補足、の 5 種類に大別している。③の具体例として次のような書き入れを挙げている。

邦訳語〈ふりがな〉	奥野による書き入れ	所在／章:節
偽善者〈ぎせんしや〉	いつはりもの	24:51
異邦人〈いほうじん〉	かみのをしへをしらざるひと	06:32
預言者〈よげんしや〉	かみのおつげをうけしひと	23:30
會堂〈くわいどう〉	ひとのあつまるいへ	23:34

文語の邦訳文に上のような書き入れをした奥野には、中村がいうような「口語的文体に改めようとする明瞭な意図」があったのであろうか。

明治期の刊行物には、漢語の左右両側に振り仮名を施したものをよく目にする。漢字列の右側に字音語の読みを振り、説明的な語釈を左側に振るのが左右両ルビの一般的な形式である。上の第 1 例「いつはりもの」は「偽善者」の語釈として左側に振るのに適当な内容と長さである。第 2 例「かみのをしへをしらざるひと」は長すぎて振り仮名としては収まりが悪い。左側でなく「異邦人」の直下に細字双行の割注として添えるか、欄外の頭注か脚注として提示すれば読者の理解を促す助けになるろう。第 3 例も同様である。ちなみに第 4 例の「會堂」は今日でいう教会の建物つまり教会堂をさす語(井料 2009)である。

このように、中村が分類するところの②③⑤の中には、改訂案でなく、邦訳原文への注

積のように受け取れるものが少なくない。しかし奥野は、語彙のレベルを越えて、①文体や④尊敬表現にまで積極的に書き入れをしており、やはり口語改訳の意図があったと考えたほうが自然である。

ただし『馬太傳』を通覧すると、全体に満遍なく書き入れがなされているのではなく、加筆の濃密な部分と粗雑な部分があり、統一性に欠ける。また、文末を口語らしくマス体に改めている箇所と原文のままの箇所が混在し一貫していない。さらに、ある語の初出時にのみ代案を書き入れ、同語が2度目以降に登場する場合に何も記述がないことも多い。要するに備忘的な個人メモを思わせる書き入れ方なのである。

仮にこれらの書き入れ全てを口語訳の改訂に反映させたとしても、文語要素が大幅に残存し、口語と文語が不統一に混在した中途半端な文章になってしまう。したがって本書の書き入れは、改訂に向けた初期の準備段階における断片的な草稿とみるのが自然であろう。

2 調査の目的・方法・結果

今回の調査は、奥野による書き入れのうち、語彙に関する記述を対象を絞った。どのような語を、どのように言い換えたかを分類整理して提示するのが本稿の主目的である。中村がいうように、奥野は文語訳の『馬太傳』を口語化する意図をもっていただけと推測される。文末の随所を丁寧なマス体に改めているのが、その顕著な表れである。文語から口語へ文体を改めるに伴い、語彙がどう変化したかを、本稿では語種に注目し、数量的な傾向として把握することにした。

奥野の書き入れは、語彙ばかりでなく、文法（例えば用言の活用の仕方など）や文体、また各種の表現にまでおよび、色々な要素が混在している。その中から語彙に関する記述を抜き出し、それ以外の項目と切り離して考察できるように、本稿では奥野の書き入れを細分化し、個々の改訂事項を独立させた。

例えば、4つの文からなる『馬太傳』第6章5節（本稿の第7節さいごに引用あり）の第2文の末尾「いのるをこのむ」に奥野は「^[が]おかむことをすきます」と書き入れし、また同節の第4文「(かれらは) そのむくひをうる」に「(かれらは) それについてよいものをもらひます」と書き入れている。本稿では、第2文と第4文を次のように区切ることで、語彙的な要素（下線を付した部分）とそれ以外の要素を分割して捉えた。

第6章5節 第2文 (原文) いのる | | を | このむ
(改訂) おかむ | こと | を | すきます

第4文 (原文) その | むくひ | を | うる
(改訂) それについて | よいもの | を | もらひます

第2文の語彙的な改訂として「いのる（祈る）」→「^[が]おかむ（^[が]拝む）」、「このむ（好む）」→「すく（好く）」という2組を抽出することができる。「^[が]おかむこと」の「こと」は、文法事項つまり動詞を名詞化する「こと」の挿入とみて、語彙的な改訂と分けて扱った。「すきます」ならびに第4文「もらひます」の「ます」は文体を改める項目であるため「すきます」「もらひます」は語彙と文体の両方にまたがることになる。これをさらに「すき | ます」「もらひ | ます」のように区切る方法もありうるが、そこまでの細分化は語彙項目の抽出にかえて煩雑すぎる。第4文の「それについて」も、これをひとまとまりとして処理した。第2文も第4文も助詞「を」は変更がない。したがって語彙的な改訂箇所は、第2文が2件、第4文が3件という数え方になる。

このように『馬太傳』全体の改訂箇所を細分化して算出したところ、奥野の書き入れは延べ1,515件にのぼった。そのうち922件が語彙に関する言い換えである。この中には、上の「いのる（祈る）」から「^[が]おかむ（^[が]拝む）」へのような単純な語の置き換えばかりでなく、「このむ（好む）」から「すきます（好きます）」へのような語彙と文体の両領域にまたがる複合項目も含まれる。

語彙に関する改訂案922件を、和語と漢語の語種の違いに着目し、A) 和語から別の和語へ、B) 和語から漢語へ、C) 漢語から別の漢語へ、D) 漢語から和語への言い換え、という4種に分類したところ下表1のような結果をえた。なお、今回の調査は漢語に照準を定めているため、表1 B～Dの数値は、和語よりも漢語の動きを如実に反映している。これらの数値化から洩れた和語（成分）の存在については本稿の第5節で後述する。

表1 語彙的な言い換えの類型別件数

邦訳文→改訂案	延べ（異なり）
A. 和語→和語	736件
B. 和語→漢語	71件（46例）
C. 漢語→漢語	51件（31例）
D. 漢語→和語	64件（36例）
合計922件	

3 本稿末の類型化資料A～Dについて

本稿末の資料A～Dは、表1 A～Dの類型化に対応しており、ヘボンとブラウンが邦訳文に選んだ語と、奥野が改訂案として書き入れた語とを照合しやすく配置した。Aを除く資料B・C・Dについては全ての語例とその所在を掲げた。Aは数が多いので、『馬太傳』全体を通して奥野が3回以上言及している語だけを一覧化した。A～Dとも用言は原則と

して終止形に統一するよう努めたが、もとの形のまま引用したものもある。

資料A 2を除き、各資料の左側がヘボンとブラウンの訳語であり、右側がそれに対する奥野の改訂案である。A 2は左右を逆転させた配置になっている。

A～Dの表記は原文に従ったが、再現が困難な漢字はワープロソフトに既存の近似の字体で代用した。漢字に施されている振り仮名は〈 〉内に示した。資料Aにおいて、仮名表記された語のうち、文脈から取り出して単語だけを示した場合、意味のわかりにくそうな語には〔 〕内に漢字をあてた。また資料B～Dのうち平仮名で表記された漢語はコロン(:)のあとに漢字を補った。あてた漢字の選択は、稿者の判断によるものである。

では、次の第4節で資料Aについて、続く第5節で資料B～Dについて解説する。

4 資料Aの1と2の関係

A類(和語→和語)のうち、言い換えられる側のヘボンとブラウンによる邦訳語を五十音順に並べたのが資料A 1で、言い換える側の奥野の改訂案を五十音順に並べたのが資料A 2である。Aの1と2は同じ素材の見方を変えた資料のため内容が大きく重複する。

A 1の3番目にある項目「いたる」を例に、A 1とA 2の関係(資料の見方)を説明する。まず本稿末の資料A 1をご覧いただきたい。奥野は『馬太傳』のうち11箇所「いたる」に「ゆく」「まゐる」「つく」の何れかを改訂案として書き入れている。このうち「ゆく」と「まゐる」に付した二重下線は、これらが同時にA 2左欄の改訂案に掲げられた語であり、かつA 1内の別の邦訳語の改訂案としても用いられていることを示す。例えば「ゆく」は「いたる」だけでなく「いる」と「さる」の改訂案としても用いられている。資料A 2の「ゆく」の項に目を移すと、9件の「ゆく」が、「いたる」「いる」「さる」「すすむ」の何れかの改訂案として記入されていることがわかる。このうち「いたる」「いる」「さる」に付した二重下線は、A 1の左欄に掲げられた語であると同時に、A 2右欄の別の箇所にも見えることを示す。例えばA 2の「まゐる」の右欄内に、二重下線を付した「いたる」が見える。このように二重下線は、複数の語と言い換え関係をもち、広く使われている語であることを示す。他方、A 1「いたる」右欄の何も下線のない「つく」は資料A 1～2の範囲内では、ここにしか見られない語である。

A 1の「いと 3 はなはだ」と、A 2の「はなはだ 3 いと」に付した単下線は、A 1右欄に対応する項目がA 2左欄にあり、A 2右欄の対応項目がA 1左欄にあることを示す。また単下線は、当該語がAの1と2の範囲内で他所に見られないことも意味する。つまり本例の場合「いと」と「はなはだ」が一对一の対応関係にあり、別の語たとえば「とても」や「ひじょうに」などで言い換えられていないことを示す。

A 1とA 2の左欄の語に付した破線(例「くらぶ」「さげぶ」など)は、Aの1と2の範囲内で、その語が他所に見られない(が3回以上あらわれる)ことを示す。

資料A (の左欄) に含めなかった、和語から和語への言い換え頻出項目として、命令表現 20 件、「(動詞+) ベシ」27 件、「(動詞+) む」11 件がある。これら 3 種は、文法事項でありながら、語彙的な選択幅をもちあわせる。命令表現は例えば「みよ」を「みなされ」「みるがよい」、「ねがへ」を「ねがつてやれ」に変更するなど、言い換え方に「…なされ／…がよい／…てやれ」といった語彙的な表現の多様性が見られる。「ベシ」も「…ます／…ましょう／…がよい／…なされ」など、「む」も「…ます／…ましょう／…ベシ」など複数の表現で言い換えられている。改訂案では「ベシ」の一部「…なされ／…がよい」は命令表現と重なり、また「む」の言い換えに「ベシ」を用いるなど、語が複雑に交錯する。文法項目と語彙項目、また語彙項目同士の入り組んだ関係を解きほぐす作業は今後の課題とし、今回は上記 3 種の項目を資料Aに含めなかった。

さらに資料Aからは大幅な言い換えを除外した。大幅な言い換えとは、例えば『馬太傳』第3章8節「されば悔^{くひ}あらたむるに…」に続く、文の後半(下記)の言い換えをさす。

(原文) かなふ | べき | | 實^みをむすべよ

(改訂) かなふ | やうに | きの | 實^みのよくなりてあからみてよきあち^{【ち】}「をもて

「はひをもてよ

もとの邦訳原文は文末を「實をむすべよ」と簡潔に終えているが、奥野はそれを具体的に詳述しようとしている。文末は「よきあちをもて」と「よきあちはひをもてよ」の2案を提示している。原文の「(實を)むすぶ」に対応する、改訂案内の語は「(實の/實が)なる」であるが、それ単独では不十分であるという判断が働いて、説明的な語句を付加したようである。「むすぶ」から「なる」への、単純な語の変更ではない、このような大幅な改訂案も資料Aに含めなかった。

つまり資料Aには、和語から和語への言い換えのうち、繰り返し(3回以上)使われ、語同士の結びつきが比較的明瞭な項目を集めた。

5 資料B～D

資料B～Dは、和語の範囲内で言い換えるAと異なり、漢語が関与する改訂案を整理したものである。B～Dでは漢語を、1字漢語と2字以上の漢語に分けた。B1・C1・D1が1字漢語、B2・C2・D2が2字以上の漢語に関するものである。

資料Bは和語から漢語への改訂案で、資料Dはその逆方向つまり漢語から和語への改訂案である。BもDも漢語のほうを基準として五十音順に並べた。したがってBは、資料の左側にある邦訳文の和語だけを眺めると並び方がバラバラで揃っていない。Cは漢語を漢語で言い換えたもので、資料の左右両側とも漢語であるが、左側の邦訳原文側の語に従って五十音順に配列した。

音と訓を組み合わせた語は、漢語成分と和語成分からなる混種語といえるが、資料B～Dでは広義の漢語と考え、漢語に分類した。また、もとの語を句に展開し説明的に言い換えた中に漢語（成分）を含む事例も漢語に分類した。

例えば『馬太傳』第27章9節では、漢字で表記された和語動詞「直積〈ねづも〉る」を、平仮名表記の「ねだんをつもる（値段を積もる）」という句に拡張する形で言い換えている。もとの和語成分「直〈ね〉」に漢語成分の「だん（段）」を補い「ねだん（値段）」という混種語（湯桶読みの漢語）を形成している。このような言い換えを本稿では、和語から漢語（2字以上）への改定案と捉えてB2に分類した。

また第21章3節では「入用〈にうやう〉」の漢字列はそのままに、振り仮名だけを「入用〈いりやう〉」と変更している。本例の場合「入」の読み方が、音の「にう（にゅう）」から、訓の「いり（<いる）」に転じて「入用〈いりやう〉」という混種語に変わっている。これを本稿では、漢語（2字以上）から別の漢語（2字以上）への改定案と捉えてC2に分類した。

C2の類例として「人税〈にんぜい〉」を「ひとのうんじやう（人の運上）」に言い換えた例（第17章25節、第22章17節）を取り上げ、先の表1で触れた数値化の問題について考えてみたい。これは「人税〈にんぜい〉」を構成する漢字を分解し「人の税」として解釈したのち「税（ぜい）」を「うんじやう（運上）」に言い換えて「ひとのうんじやう」という句に和らげた例である。本稿では漢語「運上」に注目し、この改訂案を漢語から別の漢語への言い換えC2に分類した。この場合「人税〈にんぜい〉」の「人〈にん〉」を「ひと」に言い換えた和語の部分は、表1の数値に反映されないことになる。

同じことは、上に挙げた第27章9節の「ねだんをつもる」全体をひとまとめにしてC2に分類したことにも共通する。和語「つもる」の存在は表1の数値に表れていない。同じくC2に分類した、第22章35節の「教師〈きやうぼうし〉」から「教師〈をしへのししやう〉」への振り仮名の変更も、漢語「ししやう（師匠）」に注目して数値化する一方、和語「をしへ（教え）」の存在を無視する扱い方をしている。

つまり資料B～Dは漢語（成分）の有無と異同に重点をおいた類型化であり、またそれをまとめた表1は改訂の前後における漢語（成分）の増減を示すことを主眼としている。例えば「をしへのししやう」のように部分的にでも漢語（成分）を含めば、その語句全体を漢語の扱いにしている。このように漢語に敏感（で和語に鈍感）な分類方法をとっているため、表1の数値を解釈するに際しては、そこに反映されない和語の存在を念頭におく必要がある。

表1では、Dの漢語から和語への改訂が64件（36例）であるのに対し、逆方向にあたるBの和語から漢語への改訂が71件（46例）となっている。Aは和語から和語、Cは漢語から漢語への、同じ語種間の言い換えなので、A～D全体では漢語がわずかに増える単純計算になる。

しかし例えば「教法師〈をしへのししやう〉」を1件の漢語としてではなく、0.5件の和語「をしへ」と、0.5件の漢語「ししやう」とに振り分ける修正をすれば、和語の比率が上がり漢語の比率が下がる。表1で漢語に分類した語句が和語を含む類例として、B2の「さとし→合点することはやし」「とめるもの→工面のよき」「おもはく→おもふ様子」「長老〈としより〉→長老〈としより〉の役人」（下線部が和語）を挙げることができる。またC2には「祭司〈さいし〉のをさ→おほきなる役人」「食〈しよく〉する→膳にむかふ」「尺寸〈せきすん〉→一尺か一寸ほど」「地上〈ちしやう〉→地上〈ちのうへ〉」「萬民〈ばんみん〉→萬民〈世界のひと〉」「方伯〈ほうはく〉→方伯〈おもき役人〉」「預言者〈よげんしや〉→むかしの聖人」が含まれる。

表1の単純計算では改訂後に漢語が微増するように見えるが、数値に顕在化しない和語成分の存在を考慮すると、改訂前後における漢語と和語の比率に大差はない（両者の増減は相殺されるほどの僅差である）ことがわかる。したがって奥野の書き入れを全て口語化に反映させて改訂したとしても、語種の構成比率は、ヘボンとブラウンの文語訳とほとんど変わらず、和語基調が維持される。しかし質的には次節で述べるような変容が生じる。

6 資料A～Dから概観した改訂前後における語彙の質的な変容

ヘボンらの邦訳聖書は「漢文直譯風の文體の横行せる時代に…平易なる雅俗折衷の文體を創始」（黒田 1936: 132-133）したものとしてみられ、のちの近代日本語の文体形成に少なからぬ影響を及ぼした（木村 1965: 203-205）。「雅にして雅に流れず、俗にして俗に墮さず」（藤原 1974: 68）に訳された日本語は、「漢訳臭から脱し、訳文がこなれ…漢文直訳的な文はきわめて少ない。むしろ和文体で、口語・俗語をとり入れた平易な文語体である」（海老澤 1989: 174-175）とされる。ヘボンらの中核とする聖書翻訳委員会の聖書に対する書評には、例えば「雅馴の文」「筆路頗る雅健」（上田 1896: 8）とか「高雅優美崇厳」（木村 1965: 203）などといった讃辞が散見される。

ヘボンは旧新約聖書の完訳に至る道のりを「a labor of love」（高谷 1955: 228）＝「愛の労作」（岡部ほか訳 2009: 422）としていつくしみ回顧しつつ、訳文の出来を次のように自己評価する。「I know it is highly esteemed as a literary work by native scholars who love their own native tongue without too great an admixture of the Chinese. It is easily read and understood by the common people.」（高谷 1955: 225）。漢語でなく和語を基調とし、ひろく民衆に受け入れられる邦訳を志向していたことがわかる一文である。またヘボンは「beautiful (translation)」という語を、伝道本部あての書簡に幾度か用いており（例えば高谷 1955: 94）、美しい和訳に整える配慮も欠かさなかった。

このように、もともと和文基調の平易な文語体であった邦訳の語彙を、さらに和らげて口語体に改訳するために、奥野がもっとも頻繁に手を加えたのは、和語をより平易な和語

で置き換えるA類の改訂案であった。ヘボンが和語に優雅な「美」を見いだしたとすれば、奥野はそこに平俗な「易」を求めたといえるだろう。

『馬太傳』の邦訳文が「雅」寄り、改訂案が「俗」寄りの語句を志向しているとするれば、両者の比較を通して、明治初期の人々がもっていた語感に迫ることができる。和語同士を言い換えるA類、ならびに漢語同士を言い換えるC類については、言い換え前の邦訳原語が「雅」寄り、言い換え後の改訂案が「俗」寄りの語であることが予想される。またD類の漢語から和語への言い換えは、硬質な漢語を「俗」寄りの和語によって文字通り和らげていると思われる。これとは逆方向の(名辞矛盾的な)和語を漢語で和らげるB類は、「雅」寄りの和語を「俗」な日常漢語で言い換えたことが推測される。

例えば「やくにん(役人)」という漢語は、Bの和語「みつぎとり」「長老くとしより」、Cの漢語「方伯くほうはく」「祭司くさいし」のをさ」の4語への書き入れ内に見られる(下記参照)。また「みつぎとり」への書き入れ中の漢語「うんじやう(運上)」は、「人税くにんぜい」への書き入れ「ひとのうんじやう(人の運上)」にも用いられている(前節参照)。この「やくにん」や「うんじやう」のように、複数の箇所へ書き込まれた漢語は、とりわけ日常語化の度合いが進んだ「俗」な漢語であることが予想される。

類型	ヘボンらの邦訳	奥野による書き入れ	所在/章:節
B 2	みつぎとり	うんじやうとる <u>やくにん</u>	05:46
B 2	長老くとしより	長老くとしより)の <u>やくにん</u>	26:03
C 2	方伯くほうはく	方伯くおもき <u>やくにん</u>	27:02
C 2	祭司くさいし)のをさ	おほきなる <u>やくにん</u>	26:03, 26:14

ちなみに上記の4語、延べ5箇所(05:46~26:14)に現れる「やくにん」は、先の表1の数値上、奥野の書き入れを基準にしたB 2では異なり語1例(延べ2件)として、ヘボンらの邦訳語を基準にしたC 2では異なり語2例(延べ3件)として処理している。

さて、ここでさらに注目したいのは、ほかの書き入れと同じく「やくにん」と「うんじやう」も平仮名で表記されている点である。奥野の改訂案で漢字(の追加)が見られるのは、資料A~Dの範囲内では、B 2の「たもてる」→「丈夫くじょうぶ」、C 1の「地くち」→「土地くとち」、C 2の「預言者くよげんしや」→「むかしのせい人」の3例だけである。奥野は、視覚的に語義を識別しやすい漢字に頼らず、平仮名を主用している。漢字離れた漢語(山田 1978: 223)あるいは漢語と意識されない漢語、つまり耳にただけで意味を了解しやすい、話しことば向きの語が選ばれているものと考えられる。「うんじやう」に対する「みつぎ」は「雅」寄りの和語であり、また「方伯くほうはく)」や「祭司くさいし)」は「やくにん」よりも日常語から遠い漢語であると想像される。実際、明治初期に多く出版された漢語辞書類では「役人」という漢語が、より難解な他の見

出し漢語を解説する語釈中で多用されている（今野 2011: 260-262、同 2014: 145-146）。

このように本稿の資料A～Dならびに付録テキストには、奥野個人のフィルターを通じた、明治初期の人々の語感が映し出されているはずである。これ自体、貴重な言語資料であるが、同時代の別文献と照らし合わせて本資料の妥当性を客観的・相対的に検証し、当時の人々もっていた語感の実態に迫る必要がある。今後の具体的な課題としては、当時出版された辞典類（国語辞典、漢語辞書、雅俗辞書など）ならびに通俗的な読み物や口語体志向の諸文書と、資料A～Dを照合する作業に、稿を改めて取り組んでいきたい。

7 付録、口語化改訂案入り『馬太傳福音書』電子化テキストの解説

本稿の付録は『馬太傳』のどこにどのような書き入れがどの程度の頻度（粗密さ）でなされているかが、この福音書の文脈全体において通覧できるよう作成した基礎資料である。中村（2000: 横組 76-115）が翻刻した奥野の改訂草稿を『馬太傳』の電子テキストに入れ込む形でワープロ入力した。

加工の下地となる原文として、インターネット上の Wikisource（宗教>聖書>新約聖書>へボン訳）に公開されている『馬太傳福音書』（山梨英和短期大学「門脇文庫」所蔵本を底本とする『近代邦訳聖書集成⑭ 新約聖書 馬太伝』ゆまに書房 1996年複製よりの引き写し）を利用した。ここにごく稀に見られる写し誤りや欠落を、下記の立教大学と横浜市立図書館の蔵本を参照して補った。

立教大学図書館デジタルライブラリ「海老澤有道文庫」（カラー画像）

<http://www.rikkyo.ac.jp/research/library/archives/ebisawa/index.html>

横浜市立図書館デジタルアーカイブ「都市横浜の記憶」（白黒画像）

<https://www.lib.city.yokohama.lg.jp/Archive/>

テキスト中の補助記号類、例えば漢字の振り仮名を示す《 》などは Wikisource の方式を踏襲した。ただし読みやすさへの配慮から、平仮名が連続する場合に分ち書き（半角スペース）をわずかに加えた。また『馬太傳』中の漢字には、一般のワープロで再現しにくい字体が見られる。それらは既成の字体のうちなるべく近いもので代用している。

テキストの具体例として本稿の第2節で触れた『馬太傳』第6章5節を下に引き（次頁）、電子化の要領を解説する。まず付録では各節の冒頭に4桁の整理番号を付した。次頁の例「0605」は第6章5節をさし、上2桁が章を、下2桁が節を表す。太括弧【 】でくくった部分が改訂の書き入れ箇所である。【○○<△△】とある（不等号の）右側（の△△）がへボンとブラウンによる邦訳語で、左側（の○○）がそれに対する奥野の改訂案である。次頁の例の最後【もらひますくうる】は、へボンらの「うる」を奥野が「もらひます」に

改めたことを示す。また例の中の（不等号のない）【こと】は、奥野がこの語を追加・挿入したことを意味する。逆に削除した場合は、例えば『馬太傳』第6章31節「…おも【 ϕ くひわづら】ふことなかれ」のように「 ϕ 」を用いて示した。これは「おもひわづらふことなかれ」を「おもふことなかれ」に改める旨の書き入れである。1箇所にも2案の書き入れがなされている場合は、例えば第2章5節「…そは【{むかしのせいじん／かみとしたしくせしひとびと}くよげんしや】の…」のように示した。原文の「よげんしや」に対し「むかしのせいじん」と「かみとしたしくせしひとびと」の2案が記されていることを示す。また濁点を省いたと覚しき仮名には Wikisource の翻刻方式に倣って [] 内に濁点付きの仮名を補い「おか [が] む」等と表記した。

0605 【おか [が] みをするくいのる】ときに【ぜんにんのふうをするひとく偽善《ぎぜん》しや】のごとく【にしなざるなくなるなかれ】 【と [ど] ういふわけかといへばくいかにならば】かれらは人に【みせるくみられん】ために【みだうく會堂《くわいどう》】やまちの隅《かど》にたちて【おか [が] むくいのる】 【こと】を【すきますくこのむ】 われまことになんぢらに【をしへますくつげん】かれらは【それについてくその】 【よいものくむくひ】を【もらひますくうる】

参考文献

- 秋山繁雄 (1982) 『明治人物拾遺物語：キリスト教の一系譜』新教出版社
- 井料佐紀子 (2009) 「明治期和訳聖書における〈教会〉訳語」文献探究の会『文献探究』47号1～10頁
- 上田敏 (1896) 「細心精緻の学風」帝國文學會『帝國文學』2巻8号＝通巻20号（明治29年8月）1～19頁、のち日本図書センター (1980) 複製、また矢野峰人 (1966) 編『上田敏集』筑摩書房（明治文学全集31巻）142～148頁に所収
- 海老澤有道 (1989) 『日本の聖書：聖書和訳の歴史』講談社（講談社学術文庫906）
- 岡部一興 (2009) 編、高谷道男・有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』教文館
- 木村毅 (1965) 「明治大正文学夜話〈第5回〉日本訳聖書（上）明治文学史に無視された領域」『国文学解釈と鑑賞』30巻6号＝通巻363号（昭和50年5月）203～209頁
- 黒田惟信 (1936) 『奥野昌綱先生略伝並歌集』一粒社、のち大空社 (1996) 複製（伝記叢書218）
- 今野真二 (2011) 『漢語辞書論攷』港の人
- 今野真二 (2014) 『日本語のミッシング・リンク：江戸と明治の連続・不連続』新潮社
- 佐々木晃 (1991) 訳、高谷道男監修、W.E.グリフィス (1913) 原著『ヘボン：同時代人の見た』教文館

- 鈴木英夫・福島靖子 (2000) 「明治初期の聖書翻訳について」白百合女子大学『白百合女子大学キリスト教文化研究論集』1号3～26頁
- 高谷道男 (1955) 編『The Letters of Dr. J. C. Hepburn (へボン書簡集)』東信書房
- 中村博武 (2000) 『宣教と受容：明治期キリスト教の基礎的研究』思文閣出版
- 藤原藤男 (1974) 『聖書の和訳と文体論』キリスト新聞社
- 御法川恵子 (1965) 「^{みのりがわ}聖書和訳とその訳語についての国語学的研究」東京女子大学『日本文学』25号76～87頁
- 森岡健二 (1966) 「委員会和訳聖書の文体と漢訳聖書」国際基督教大学キリスト教と文化研究所『国際基督教大学学報IV B キリスト教と文化』2号1～57頁、のち森岡健二 (1991) 『近代語の成立 語彙編』明治書院 161～206頁＝第6章「新約聖書の和訳」として所収
- 望月洋子 (1987) 『へボンの生涯と日本語』新潮社 (新潮選書)
- 山田俊雄 (1978) 『日本語と辞書』中央公論社 (中公新書 494)

資料

●資料A1 ● 和語から和語へ (その1) 3回以上言い換えられた原語

原語 (五十音順)	件数	改訂案
あたふ [与ふ]	1 1	あげる、くれる、くださる、 <u>はらふ</u> 、つかはす
あたふ [能ふ]	5	できる、かなふ、いたす
いたる	1 1	<u>ゆく</u> 、 <u>まゐる</u> 、つく
いづ [出づ]	1 0	<u>でる</u> 、 <u>はなれる</u>
いづれ	8	<u>どちら</u> 、 <u>どこ</u> 、なに、いつ
いと	3	<u>はなはだ</u>
いぬ [寝ぬ]	5	<u>ねむる</u> 、 <u>ねる</u>
いのる	4	<u>おがむ</u> 、おがみをする
いふ	1 8	<u>まうす</u> / <u>もうす</u> 、 <u>はなす</u> 、こたへる、とききかす、 <u>おもふ</u>
いやす	1 1	<u>なほす</u>
いゆ [癒ゆ]	8	<u>なほる</u>
いる [入る]	9	<u>はいる</u> 、 <u>ゆく</u>
う [得]、える	8	<u>できる</u> 、 <u>かなふ</u> 、しる、とる (8件中2件が「える」)
うく [受く]	9	うける、 <u>うけとる</u> 、 <u>あづかる</u> 、 <u>もらふ</u> 、さづけられる
おこなふ	4	<u>いたす</u>
おほひ (なり)	4	<u>おほきく</u> …
首 (かうべ)	3	首 (あたま)

かく〔斯く〕	7	<u>その</u> 、 <u>とほり</u>
きたる	9	<u>くる</u> 、 <u>まいる</u> 、おいでになる
<u>くらふ</u>	3	くふ、たべる
ごとし	6	<u>とほり</u>
衣〈ころも〉	5	衣〈きもの〉
<u>さけぶ</u>	3	よばはる〔呼／喚ばわる〕、こゑをたてる
さる〔去る〕	8	<u>ゆく</u> 、 <u>でる</u> 、たつ、かへる、たちさる、にげさる
しめす	4	しらせる、 <u>はなす</u> 、かたる
しる〔知る〕	6	しれる、しらせる、しつてゐる、しりてをる
す〔爲〕	5	<u>いたす</u>
たづさふ	3	<u>つれる</u> 、もつ
たまふ	1 1	<u>くださる</u> 、～なさる
民〈たみ〉	6	民〈ひと〉、 <u>ひと</u> 、 <u>ひとびと</u>
ちかふ	4	<u>ちかひをたてる</u>
つぐ〔告ぐ〕	3	しらせる、おしへる
なす〔爲す〕	2 8	<u>いたす</u> 、 <u>する</u> 、おこなふ
なり	3	<u>である</u> 、であります
汝〈なんじ／ぢ〉(ら)	1 6	<u>おまへ</u> (がた／かた)、 <u>おまへさん</u> (がた)、あなた
ほつす	1 1	<u>おもふ</u> 、～たい
<u>むくひ</u> 〔報ひ〕	3	めぐみ、もの (をもらふ)
<u>むくふ</u> 〔報ふ〕	3	よきこと (よいこと) をさつ〔づ〕ける
目〈め〉しひ	5	<u>目〈め〉くら</u>
<u>わたす</u>	3	ひきわたす、とらはれてひかれる、おとす
わづらふ	3	<u>くるしむ</u>

●資料A2● 和語から和語へ(その2) 改訂案に3回以上登場する語

改訂案(五十音順)	件数	原語
あげる	3	<u>あたふ</u> 〔与ふ〕、つかはす
首〈あたま〉	3	首〈かうべ〉、かしら
あづかる	3	<u>うく</u> 〔受く〕
いたす	2 7	<u>なす</u> 、 <u>す</u> 、 <u>おこなふ</u>
うけとる	4	<u>うく</u> 、とる
<u>うちたたく</u>	3	むちうつ、たたく
おがむ	4	<u>いのる</u>
おほきく(なる)	3	<u>おほひ</u> (なり)

おまへ (かた／がた)、おまへさん (がた)	1 6	<u>なんぢ</u> (ら)、 <u>なんじ</u> (ら)
おもふ	1 2	<u>ほつす</u> 、 <u>いふ</u> 、おもはく
仇／敵 (かたき)	4	仇／敵 (あだ)、あだびと＝人
かなふ	4	<u>う</u> [得]、 <u>あたふ</u> [能ふ]
衣 (きもの)	5	衣 (ころも)
くださる	1 0	<u>たまふ</u> 、 <u>あたふ</u> [与ふ]、くわふ
くる	7	<u>きたる</u>
くるしむ	3	<u>わづらふ</u>
しらせる	5	<u>つぐ</u> [告ぐ]、 <u>しめす</u> 、 <u>しる</u>
する	1 0	<u>なす</u>
その	4	<u>かく</u> (の)
ちかひをたてる	4	<u>ちかふ</u>
つれる	4	<u>たづさふ</u> 、ともなふ、ともに
である	3	<u>なり</u>
できる	7	得 (う)、 <u>あたふ</u> [能ふ]
でる	9	<u>いづ</u> [出づ]、 <u>さる</u> [去る]
どこ	5	いづこ、 <u>いづれ</u>
どちら	4	<u>いづれ</u>
とほり	1 2	<u>ごとし</u> 、 <u>かく</u> 、かかる、しかり
なほす	1 1	<u>いやす</u>
なほる	7	<u>いゆ</u>
ねむる	3	<u>いぬ</u> [寝ぬ]
ねる	3	<u>いぬ</u> [寝ぬ]、ふす
はいる	8	<u>いる</u> [入る]、ひきいる
はなす	5	<u>いふ</u> 、かたる、 <u>しめす</u>
はなはだ	3	<u>いと</u>
はなれる	3	<u>いづ</u> [出づ]
はらふ	3	<u>あたふ</u> [与ふ]
民 (ひと)、ひとびと	6	民 (たみ)
まうす／もうす	1 2	<u>いふ</u>
まゐる	4	<u>いたる</u> 、 <u>きたる</u>
目 (め) くら	5	<u>目 (め) しひ</u>
もらふ、もらう	4	<u>う</u> [得]、 <u>うく</u> [受く]
ゆく	9	<u>いたる</u> 、 <u>いる</u> [入る]、 <u>さる</u> [去る]、すすむ
よろしい	3	かなふ、まさる

●資料B1 ● 和語から漢語へ (1字漢語) 9例12件

原語	改訂案の五十音順とその所在、例えば 0544 は『馬太傳』第5章44節
いつくしむ	あいする：愛する 0544,1037,1037
とどめる	きんずる：禁ずる 1914
みたまふ	ごらんなさる：ご覧 0604,0606
ただちに	じきに：直に 1305
あたひ	ちん：賃 2008 (B2「ちんせん：賃銭」参照)
おろか	どん：鈍 2319
まもる	ばんをする：番 2736
ひとや	らう：牢 1403
例〈ためし〉	例〈れい〉 2715

●資料B2 ● 和語から漢語へ (2字以上) 37例59件

(注) 混種の語句には平仮名表記の漢語(要素)部分に下線を付した。

右欄の“[”印で括った語(例「いつはい」他)は同一語として扱った。

原語	改訂案(五十音順)とその所在
けがす	あくこうする：悪口 2739
ともなる	いつしよなる：一緒 2611
みつるほど	┌いつはい：一杯 1537
みてり	└いつはいなり：一杯 2325,2327,2328
みつぎとり	<u>うんじやう</u> とるやくにん：運上とる役人 0546
さとし	がてんすることはやし：合点 1119
とめるもの	くめんのよき：工面 1924
粧〈よそ〉ふ	けしやう(を)する：化粧 0629
しもべ	けらい：家来 2445,2446,2448,2450
審判〈さばき〉	審判〈さいばん〉 0521
くつ	ざうり：草履 0311
足〈たる〉	┌じうぶん：十分 1025
盈〈みて〉る	じうぶんになる：十分 0506
飽〈あき〉る	└じふぶんに(～する)：十分 1420,1537
すゑ	┌しそん：子孫 2725
あひつぐ	└しそんのつぐ：子孫 0505
みな	しちにんともに：七人 2228
つかさどる	しはいする：支配 2521,2523

おのれ	じぶん：自分 2509
ただしき	しやうじき：正直 0601
たもてる	丈夫〈じようぶ〉 0917
ささげる	しんじやうする：進上 0211
しのぶ	しんぼうする：辛抱 1022
かれら	にせのぜんにん：(偽の) 善人 0608
友〈とも〉	「友〈とも〉 <u>だち</u> ：友達 1119,2013,2650
とも	「とも <u>だち</u> ：友達 1356,2669,2671
あたひ	ちんせん：賃銭 2004 (B 1 「ちん：賃」参照)
糧〈かて〉	くひものきもの <u>どうぐ</u> ：道具 0625
いしずゑ	どだい：土台 0725
なやみ	なんき：難儀 2409
直積〈ねづも〉る	ね <u>だん</u> をつもる：値段 2709
病〈やめる〉	病〈びやうきの〉：病氣 1435
まづしき	「びんばふなる：貧乏 2611
まづしきもの	「びんぼうにん：貧乏人 2609
つみ	ふちうはふ：不調法 0612
ひれふす	へいふくする：平伏 0211,0409
冥途〈よみち〉	冥途〈めいど〉 1123
おもはく	おもふ <u>やうす</u> ：様子 1225
みつぎとり	「うんじやうとる <u>やくにん</u> ：運上とる役人 0546
長老〈としより〉	「長老〈としより〉の <u>やくにん</u> ：役人 2603
たづさふ	ようい：用意 2503
榮〈さかえ〉に	りつばなるにも：立派 0629
すなだるもの	れうし：漁師 0418
獄〈ひとや〉	獄〈ろうや〉：牢屋 1102,2536,2544

●資料C 1 ● 1字漢語から2字漢語へ、9例 20件

原文(五十音順)	改訂案とその所在
師〈し〉	師〈し〉しやう：師匠 0911,1024,1238
食〈しよく〉する	食〈しよく〉じをする：食事 0911 (C 2 「 <u>ぜん</u> にむかふ」参照)
信〈しん〉	信〈しん〉かう：信仰 0810,0813,0826,0922,2618,2742
地〈ち〉	土地〈ち〉(とち) 0221
地〈ち〉ふるふ	地〈ち〉しんがする：地震 2751
忠〈ちう〉	ちゆうぎ/ちうぎ：忠義 2521,2521,2523,2523

約〈やく〉す 約〈やく〉そくする：約束 1407,2615
 海陸〈かいりく〉 とち：土地 2315 (海陸をめぐり→うみをわたりとちをめぐり)
 その二その三その七 そのじなんそのさんなんそのしちなん：二男 三男 七男 2226

●資料C2 ● 漢語 (2字以上) から別の漢語へ、21例 30件+例外1件「食する」*印

原語 (五十音順) 改訂案とその所在
 異邦人〈いほうじん〉 異邦人〈いこくじん〉：異国人 0415
 淫欲〈いんよく〉 淫欲〈いんじのよく〉：淫事の欲 2325
 荷擔〈かたん〉 いちみは：一味派? 2330
 偽善〈ぎぜん〉しや 偽善者〈にせのぜんにん〉：偽の善人 0602,0605,0616,0705,2313
 教法師〈きやうぼうし〉 教法師〈をしへのししやう〉：教えの師匠 2235
 會堂〈くわいどう〉 みだう：御堂 0602,0605
 公廳〈こうてう〉 公廳〈おやくしよ〉：お役所 2727
 祭司〈さいし〉のをさ おほきなるやくにん：大きなる役人 2603,2614「方伯」参照↓
 主人〈しゅじん〉 主人〈だんな〉：旦那 2445
 食〈しよく〉する* ぜんにむかふ：膳に向かふ 2607*
 席上〈せきじやう〉 ざしき：座敷 1409
 尺寸〈せきすん〉 いつしやくかいつすんほど：一尺か一寸ほど 0627
 地上〈ちしやう〉 地上〈ちのうへ〉：地の上 2430
 天下〈てんか〉 せかい：世界 2414
 入用〈にうやう〉 入用〈いりやう〉 2103
 人税〈にんぜい〉 ひとのうんじやう：人の運上 1725,2217
 博士〈はかせ〉 博士〈がくし〉：学士 0201
 萬民〈ばんみん〉 萬民〈せかいのひと〉：世界の人 2414
 不法〈ふほう〉 不法〈むはふ〉：無法 2328
 方伯〈ほうはく〉 方伯〈おもきやくにん〉：重き役人 2702「祭司…」参照↑
 預言者〈よげんしや〉 むかしのせいじん：昔の聖人 0712 (…せい人) ,0817,2411
 疫病〈ゑきべう〉 疫病〈やくべう〉 2407

●資料D1 ● 1字漢語から和語へ、19例 43件

原文 (五十音順) 改訂案とその所在
 惡〈あく〉 あしき 0613
 海陸〈かいりく〉 うみ 2315 (海陸をめぐり→うみをわたりとちをめぐり) C2参照
 義〈ぎ〉ある ただしき 2335,2335
 金〈きん〉 金〈かね〉 2609

銀〈ぎん〉	銀〈かね〉 2812
きん(禁)ず(る)	ととめる 1914
坐〈ざ〉す	すはる 0501,0910,1301,1302,2244,2620,2658,2719,2802、をる 2302
師〈し〉	あなた 0914
死〈し〉す	しぬ 0220,0918,0924,2227
生〈しやう〉ず	はえる 1326
主〈しゆ〉	あなた 0314、かみ 2802
信〈しん〉ず	まことにする 2423
聖〈せい〉なり	聖〈きよらか〉なり 0706,2531
善〈ぜん〉	よいこと 2521,2523
全〈ぜん〉	まったくの 2659 (全公會→まったくの公會)
拝〈はい〉す	おかむ 0409,2809、(お)めどおり 0202
命〈めい〉ず	おほす 0403,0818,1409,1419,2619,2710、いひつける 0406
亂〈らん〉	亂〈さはぎ〉 2605
爐〈ろ〉	爐〈かまと〉 0630

●資料D2 ● 漢語 (2字以上) から和語へ、17例 21件

原文 (五十音順)	改訂案とその所在
以下〈いか〉	した 0216
異邦人〈いほうじん〉	このをしへをしらぬ人 0607、かみのをしへをしらざる人 0632
飲食〈いんじよく〉	飲食〈のみくひ〉 2449
義人〈ぎじん〉	義〈たゝしき〉人 2329,2335
偽善〈ぎぜん〉	いつはりのよきこと 2328
會堂〈くわいどう〉	ひとのあつまるいへ 2334
權勢〈けんせい〉	かみさま 2664
充滿〈じゅうまん〉	はなはたおほく 2210
士卒〈しそつ〉	士卒〈あしがる〉 2812
清淨〈しやうじやう〉	清淨〈きれい〉に／〈きよく〉 2317、〈きよらか〉 2319
庶族〈しよぞく〉	あらゆるひとびと 2430
畑地〈はたち〉	畑地〈はたけ〉 2138
萬民〈ばんみん〉	萬民〈よろつのひと〉 2409
綿羊〈めんよう〉	綿羊〈ひつし〉 0715,2631
容貌〈ようぼう〉	容貌〈かほかたち〉 2803
預言者〈よげんしや〉	かみのおつげをうけしひと 2330
和睦〈わぼく〉	なかなかほり 0509